



日本語に 出会い なおす

外大には日本語を含め、26の専攻語があります。新しい言語との出会いは、新たな人との出会いや知識のひろがりをもたらすとともに、ふだん何気なく使っている日本語を見つめなおすきっかけともなることでしょう。そこで、三人の先生方に「日本語に出会いなおす」をテーマにエッセイを寄せていただきました。(編集部)

身体のリズムをとらえる文体

亀山郁夫

この一、二年、精力的に読書に励むようになった。研究に割くだけの十分な時間がないかわりに、逆に余裕をもって読書を楽しむことができる。基本的に日曜大工と割り切っている翻訳の作業は、塵も積もればのたとえ通り、細かく時間をつないでいるうちに、いつの間にかそれなりの塊が出来あがる仕組みである。もっとも、学術研究となる

とそうはいかない。持続的に、粘りづよく思考をつづけ、それ相当の文献を読みあげなくてはならない。かりにその作業を少しでも怠れば、結局のところは一人よがりの仮説に終わってしまうだろう。

最近、読んだ本のなかで、作家の文体という側面からいなく興味をそそられた小説があった。大江健三郎さんの最

新作『水死』（講談社）である。常日頃思うのだが、大江さんの小説に、少なくとも文体面からみて唯美的という表現はあてはまらない。むしろ、既存の日本語に対してつねに批評的であろうとする姿勢がうかがえる。つまり、自動化された、というか、読みやすいかわりに記憶に残らない、といった文体と質的にかなり異なっている。むしろ文体の記憶がいつまでも鮮やかに残るのが大江さんの小説である。驚きを作りだす文体という方法意識の点で、また、日常言語のなかに小さな文体実験をぎりぎりまで溶け込ませようという努力において、大江さんほど意識的な作家はいないかもしれない。

ところがである。最新作『水死』を読んで、その大江さんが、文体面である究極的な地点に近づこうとしていることをつよく印象づけられた。むしろ、それはわたし個人のひとりよがりな印象にすぎない可能性もある。一般読者の反応を見ても、これが大江さんか、と思うほど読みやすい、という声が少ない。しかしここで問題にしたいのは、「読みやすい」という印象が、はたしてどこまで正しいか、どうか、ということである。印象に、正しいか、間違いかなまかろうという、へそ曲がりな読者もおられるだろう。しかしそれはそう単純ではない。なぜなら、読者が「読みやすい」との印象をいだけ小説は、往々にして、作家の側

慮するということだ。とすると、作家は、まず第一に、自分に対してコアな関心をもつ読者の意識をしつかり想定してかからなくてはならない。新しい小説を、何よりも彼らの感覚にどうフィットさせるか。むしろ、それが読者へのおもねりであってはならないから、作家は、みずからの良心に照らしてその問題を考えつくす必要がある。たとえば、「思っています」と「思ってます」の表現をどう使い分けるか、そういう細かな点にも書き手は十分な配慮を怠ってはならない。会話であれ、地の文であれ、「思っています」で統一する、というのも一つの正当な手立てだろうが、そうした意固地な態度でどこまで読者を惹きつけていけるのか。読者が活字に求めているのは、表現上のごく小さなあややおして伝えられる感覚のメッセージである。そのメッセージはもはや言葉ですらない。携帯やEメールの文章が、じつは限りなく相手への配慮を必要としていることに気づいている人も少なくないはずだ。相手の顔が見えず、視覚的に反応を確認できない以上、頼るべきは表現の内容よりも、その方法である。携帯やEメールでは、おのずから心の微妙な動きを伝えるアーティキュレーションの技法が不可欠である。紋切り型は、通用しない。規範すらも存在しない、と言ったら大げさだろうが、規範は無限の多様性をはらむといった程度の認識は必要である。少し飛躍し

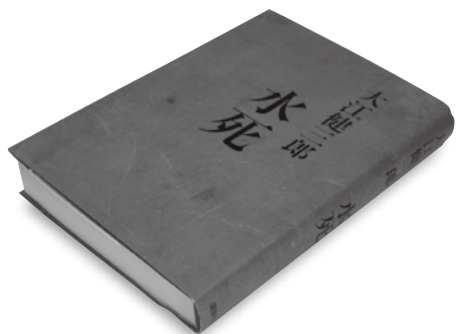
からの周到な仕掛けが隠されている場合が少なくないからだ。一言でいって、読者の身体的リズムの感覚とたくみにフィットさせるための手法——。思うに、現代ほど、作家が、リズムという問題に敏感にならざるをえない時代はないのかもしれない。

基本的に、作家は、自分の書いたものが読まれなくては何の意味もなさないと考えている。しかし、今日、アクティヴに本を手にとろうとする読者は皆無にちかく、友だちが読んでいるから読む、話題になっっているから読む、というのが基本的なスタンスである。読者は時間に追われ、なにごとく短時間で仕上げたい。ということは、同じ分量の小説でも読む時間をできるだけ縮減できるように、作家は配

た言い方をすれば、世界がこれだけの悲惨さに満ちているというのに、文体だけが厚化粧で澄ました顔をしていられるわけがないということだ。リズム、リズム——。

私はいま空想している。『水死』の執筆に立ち向かった大江さんもまた、心のどこかで「最後の小説」を意識しながら、ついにその、身体のリズムという原点に立ちかえろうとしたのではないかと。物語は、朝の散歩を楽しんでいた老作家が、ジョギングしながら彼を追いかけてきた一人の若い女性と出会うところから始まる。そして物語は、その女性の、過去の記憶からせり上がる轟音のごとき悲鳴とともにクライマックスを迎える。

かめやま・いくお 一九四九年生まれ。東京外国語大学長。ロシア文学者。著書に『甦るフレイブニコフ』（平凡社ライブラリー）、『磔のロシア—スターリンと芸術家たち』（岩波書店）、『ドストエフスキー 父殺しの文字』（NHK出版）など。訳書に新訳『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』（ともに光文社古典新訳文庫）など。



幼い頃から父の転勤に伴って各地を転々としたためであろう。地域によって、人によって、話すことばが違うこと、それらは「日本語」と呼ばれるが、その多様さの限りないことを実感しながら、私は育った。

私が中学に入ると、父は単身赴任をするようになり、家族は東京に落ち着いた。新しい土地のことばを素早く覚える習慣がついていた私は、他人のことばを真似ることを得意としたが、自分のことばといえは、欠かさずつけていた日記の書きことばにこそあれ、話しことばには見つからないような気がしていた。学校では才能豊かな友人Kを得て一緒に演劇クラブをつくったが、当時の私たちの十八番ときたら「金色夜叉」の熱海のシーンを、怪しげないくつかの地域語バージョンでやってみるといった神をも恐れぬ輩行であった。

山本安英の会では、月に一度、神保町の岩波ビル九階の集会室で「ことばの勉強会」を開いていた。私はそこに通い始めた。勉強会の大きなテーマは、日本語のせりふの発声、デクレーション（木下順二によると「強いて訳せば朗誦術」）の探究で、「古典の朗読はどこまで可能か」という実践も進められていた。伝統芸能における表現の工夫や、各地で育まれた地域語のエネルギーを如何に生かすか、といったことも、それにかかわる問題としてしばしば話題に上った。

ある日、「ことばの勉強会」の受付で、「先生があなたに会いたいと言っている」と言われ奥に通された。木下順二先生がいた。

「この子に会ってみたいと思わせる名文の手紙」が高校のY先生より送られていたのだった。人形劇の登場人物の声を一人で演じ分けるとか、民話や絵本をステージで語るとか、声のことばの試みに余念のない私を見て、Y先生がしてくれたことだった。

程なく私は千駄木駅から団子坂を上りきったところにあつた山本安英先生の自宅兼稽古場に通うようになった。三か月の見習い期間を経て内弟子入門を許された私は、学校が終わると稽古場に行き、稽古に励んだ。古典を含む作品の朗読に取り組みながら、かつての日本語文学は、みな

高校生になって初めて自分の小遣いで演劇のチケットを買った。かねて見たかった「夕鶴」。劇作家木下順二の初期の作品で、女優の山本安英が鶴女房の「つう」を一千回演じたことで知られる舞台だが、当時すでに七百回を超えていた。場所は、有楽町にあつたそごうデパート最上階の読売ホールで、私の席は、後ろの左の方だった。

そこで私は、驚くべき声のことばに出会ったのだ。山本安英の声が、私をくまなく満たした。声とことばに寸分の隙もない。声のすべてがそのことばのすべてを伝えてくる。密度の高いその声は、張り上げるのでも振り絞るのでもないのに、劇場のすみずみにまでよく通るのだ。それは、それまで私が聞いてきた誰のことばとも違って、演劇クラブでそれと思つて稽古をしていたせりふのことばともまるで違っていた。決定的な出会いであった。

声のことばのためのものだったことを理解した。

「眠っている文字を起しなさい」

と山本安英先生は言った。紙に張り付いて深く眠っている文字に息を吹き込んで、命あることばとして目覚めさせる。そのことばが本来そうであったように生き生きと立ち上らせ自由にするには、まず「まっすぐな声を持たなければならぬ」と先生は言った。基本の声に歪みがあつては邪魔になる。生涯をかけて磨いてこられたその声で、先生は惜しみなく教えてくださった。

やがて、木下順二先生が「平家物語」に基づく新作「子午線の祀り」を発表し、その上演の準備が始まった。能、歌舞伎、狂言の役者と新劇俳優との共演で、原文の群読と現代語の台詞による壮大な運命のドラマであった。私の初舞台は、その第一次公演の「重衡の北の方」。十九歳の春のことだった。

かわじ・ゆか 一九五九年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。日本語教育論・日本語教育史。著書に『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生——戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開（港の人）』、『三十一文字の日本語（共著、おうふう、朗読CD付）など。二〇〇八年秋、源氏物語千年紀の催しの一環としての公演「マルチリンガル朗読〈葵〉」に際しては、演出班に加わり、日本語パートの朗読を担当した。

にほんごで育つ子供や鯉幟

昨年発表したこの句に、「そうだ、やはり日本人は日本語で育てるべきなのだ。」という鑑賞が寄せられ、とまどってしまった。一部の読者の愛国心を刺激してしまったようだ。

この句で「にほんご」という表記を用いたのには、私たちが普通に「国語」として接している「日本語」と区別する意図があった。「にほんご」で育つのは、日本生まれの日本人だけとは限らない。海外で生まれ育っても、家の中で日本語が使われていれば母語は「にほんご」になる。また、日本に来た外国生まれの子供たちにも、「にほんご」で遊び、

うことはまれではない。気づきにくいかもしれないが、実は「にほんご」だって一様ではないのだ。一〇〇%日本語で育っても、日本語の一〇〇%を身につけていることはあり得ない。まだまだ未知の「にほんご」があるはずだ。

留学生日本語教育センターでは、様々なカテゴリーの留学生が学んでいる。母国で日本語を学んできた短期の交換留学生もいれば、来日後ひらがなから学び始めて一年後には日本の大学に入学する国費留学生もいる。日本語を学ぶ彼らにとっては、当然、毎日が「にほんご」との出会いである。また、日本人の発想からは出てきにくい質問にさらされる教師にとっても、毎日が「にほんご」との出会い直しだと言えるかもしれない。「にほんごを」学ぶことから始めて、やがて「日本語で」学ぶようになる留学生との日々は、刺激に満ちている。留学生の俳句の自由な発想には、「にほんご」への期待が満ちているようで、毎回驚かされる。だから、日本語教育は面白い。

日本語を学習対象として見ると、日本人の考え方と日本語の発想とが別ちがたく結び付いていることに気づく。例えば、「手伝ってくれた」「手伝ってもらった」「手伝ってあげた」のような恩恵の授受表現はどうだろうか。日本人の多くはごく自然に使い分けるが、日本語学習者にとっては、まずこれらの表現を使うという意識が第一段階であり、

「にほんご」で学ぶ機会があるだろう。一〇〇%日本語で育つ子も数%の子も「にほんごで育つ」仲間であり、すくすく育ってほしいという願いを鯉幟に託したのが掲句である。

日本語で育つと、日本語の持つ豊かさも制約も、日本語の考え方も自然に身につく。あまりにも身につけているから、その豊かさや制約に気づかず過ぎているのが普通だろう。では、どんな時に自分の「ことば」を再認識するのだろうか。

他者に出会うことで自分が見えてくる——このことは言葉についても言える。外国語を学ぶことが「にほんご」を見直す機会になるのは言うまでもない。その前に、違う地方出身の友人に「にほんご」が通じなかった経験をした人はいないだろうか。日常使っていた語彙が方言だったとい

どれを使うかは次の段階に来る。学習者から「わたしはともだちにてつだった。」という文が出てきたら、だれが何をしたのかという客観的な事実を確かめ、どう表現したいかという主観的な語り方を選ぶという手順が必要になる。「手伝ってもらってください。」や「手伝ってくれた人はだれですか。」という文が使えるシチュエーションがぱっと思い浮かぶようなら、日本語の発想が身についていると言えるだろう。

「おや、日本語ってこうだったのか。」「日本語っておもしろい。」そんな経験をどんどんしてほしい。そのために、日本語を学んでいる友人や自分とは違う日本語を話す友人をたくさん作ってほしい。留学生といっしょに俳句に挑戦してみるのもいいかもしれない。未知の「にほんご」に出会うチャンスが、みなさんの前にはたくさん転がっている。

すがなが・りえ 一九六六年生まれ。俳号は横井理恵。東京外国語大学留学生日本語教育センター准教授。日本語学・文法論。著書に『複号助詞がこれでわかる』（共著、ひつじ書房）、『展望現代の詩歌11 俳句Ⅲ』（共著、明治書院）、句集『天真』（ふらんす堂）など。